深見玄岱について

—近世日本における中国語の受容に関する一考察—

朱　全安

一　はじめに

深見玄岱（一六四九年——一七二二年）は江戸時代の漢学者であり，医家，書家としても名を成し，とりわけ，第六代将軍徳川家宣の時期に幕府の儒者に任じられてから，約十年の在職期間中，朝鮮通信使との詩の唱酬や，清律の研究など数多くの業績を日本文化史に残した碩学であった。しかし，今日においては，深見玄岱の名が聞かれるのは僅か書道界においてだけであり，彼の事績の殆どは忘失されつつある。深見玄岱の業績は彼の学識蘊蓄によるだけでなく，実はその多くが彼の中国語に対する深い造詣によるものであった。

1．深見玄岱を研究する意義

近世日本における中国語の受容過程については，歴史的な社会状況，文化背景に関連づけられた具体的な事例や実証的な解明がまだまだ少ない。本研究では深見玄岱の中国語の能力とその実際への応用の究明に重点を置き，歴史的，社会的，文化的脈絡との関わりから具体的に中国語受容の一つの事例を提示したい。

① 江戸時代の中国語受容の概況

深見玄岱が近世日本の中国語受容過程において，どこに位置するのかを検討する前に，まず江戸時代における中国語受容の概況について触れたい。

江戸時代に，中国語の教育，習得に携わり，一時の中国語（当時の言い方では「唐話」）の流行を醸し出した人々には，主に三つの流れがあった。すなわち，長崎の唐通事，江戸初期に来日した黄檗の僧侶，そして当時の漢学者たちの三つの系譜である。

唐通事が長崎での中国貿易に中国語を実用したのが始めであり，その後承応三年（一六五四年）に，隠元が中国より二十数名の中国僧侶を率いて来日し，その後，内地の儒学に対する講究の深化につれ，学者による中国語の研究もなされるようになった。

② 深見玄岱の位置づけ

江戸時代の中国語受容過程に見られる三つの系譜は，決してそれぞれ没交渉に独自に一派をなしているのではない。例えば，唐通事と黄檗僧侶との交流，唐通事と漢学者との交友，あるいは漢学者と黄檗僧侶との交際があったことを示す断片的な史料が僅かに見出される。しかし，実際にその交流の次第，経緯については未詳である。

深見玄岱は唐通事の家系の出身者で，彼の中国語の素養は生まれ育った家庭環境と密接な関係があり，唐通事である父親の伝授教育および彼の師である中国人の黄檗僧，独立の影響によって培われた。

玄岱は二十六，七歳の時，故郷の長崎から京都に赴き，木下順庵の門に入ってから，内地の漢学者たちとの交際を始め，後々，彼自身も漢学者としての才能を認められて幕府の儒者になり，木門の同学である新井白石や室鳩巣などと同時期に活躍した。彼の漢学者としての活躍の根底には幼い時から身に付けた中国語の蘊蓄があった。それゆえ，深見玄岱についての考究は当時の中国語受容の実態を解明するために必要であると考える。

2．従来の研究による深見玄岱に対する評価

いままでの深見玄岱の業績についての研究は，彼の学問や医道，書道に関するものが大半であり，したがって，彼に対する評価は，儒者，儒医，書家，文化人などである(1)。だが，史料からみれば，深見玄岱は学者であるのみでなく，彼の活躍は中国語の能力によるところが大いにあった。また，深見玄岱に対する研究そのものが，彼と同時代に活躍した学者，若しくは木門出身の同窓たち，例えば，新井白石，室鳩巣，榊原篁洲，雨森芳洲，祇園南海などについての研究より遥かに少ない上に，管見の限りでは，彼の中国語の能力についての先行研究は皆無に等しい。

小論においては，先行研究が殆ど触れていない深見玄岱の中国語能力およびその応用実践について焦点を絞り，彼が生きたその社会の状況や文化の背景とも関連づけながら検討を加え，その実態の解明を試みたい。

二　深見玄岱の中国語能力の素地

1．唐通事家系の出身

深見玄岱の中国語の素養は彼が唐通事家庭の出身と密接な関係があると思われる。深見玄岱（一六四九年―一七二二年）は長崎唐通事の家に生まれ，父親は深見大誦であり，玄岱はその父親が大通事になった後に出生し(2)，大誦の四男であった。

---

(1)　『訳註　先哲叢談巻五』（藤田篤訳，東京金港堂書籍，明治四十四年）高玄岱の項を参照されたい。また，多磨霊園にある深見玄岱の墓に書かれた墓銘誌には，「江戸中期の書家」と記され，また，『東京掃苔録』（藤波和子，東京名墓顕彰会，昭和十五年）に深見玄岱の項に「名は貞恒，字を子新，通称新右衛門，天漪と號す。戴曼公に書と医学と儒教を学び，初め医師として薩摩公に仕え，後幕府儒官となる。書は一代にして名をあげ，最も草書を得意とした。」と記している。

(2)　『訳司統譜』（『長崎県史』史料編第四，長崎県史編纂委員会編，吉川弘文館，昭和四十年）の小通事の項によれば，「寛永十八巳年六月　小通事被仰付候　　仁兵衛代り深見久兵衛」（六二〇頁）とあり，また，同書の大通事の項に，「寛永廿未年新ニ大通事被仰付候　万治二亥年十月御暇御免」（六〇六頁）と記している。

彼の幼名は梅松と言い，後に元泰と改めて，さらに中年から晩年にかけて用いた名，玄岱と改めた。号は天漪，婺山であり，字を斗瞻，子新といい，通称は新右衛門である[3]。玄岱は父親が大通事として大いに活躍していた時期に生まれ育ったので，彼も一般の唐通事の家庭で行われていた教育，唐通事家系の特殊教育としての「唐話稽古」を受けていたであろう。

① 唐通事職制の由来・役割・人選

唐通事家系の家庭ではなぜ「唐話稽古」，すなわち外国語としての中国語を子どもが幼い時期より教育したのか，これについて少し触れてみよう。

長崎開港後，江戸時代に入ってから長崎に入港する明の商船は逐年増え，長崎に来航した中国人の人数も増加し続けていた。慶長七年（一六〇二年），中国福建省出身で長崎在住の商人欧陽華宇と張吉泉らが悟真寺を開創，唐人墓地を建設したことが出発点となり，長崎の華僑社会が形成されていた[4]。当時の中国人に対する「唐人」という呼称は，奈良時代，平安時代に行われた遣唐使の派遣より，中国の政治，経済，文化の諸制度を中国の唐代から取り入れたため，中国は「大唐」であるという歴史的イメージから，「唐人」を中国人の代名詞として使うようになったと伝えられていた。また，江戸初期は中国の明末清初の動乱期にあたり，清朝を嫌って日本に亡命した長崎に在留する中国人も自ら自分のことを「唐人」と称していた。当時長崎に渡った中国人には，明国の衰亡により，反清朝派の明の遺臣たちが多かった。彼らは本国では上流階級に属していたので，教養も財産もあり，長崎の文化，経済に対して大きな影響を及ぼした。

徳川家康は日明勘合貿易の再開を望んでいた。老中本多正純の名で文をもって，中国福建総督に勘合貿易の再開，使舶の復活を請う意向を示したが，家康の意は，結実されなかった。しかし，そのことは福建一帯の貿易商人の間に響き，その後，中国船の日本への渡来が頓に増え，来日した中国人の数も倍増した[5]。

江戸時代初期の中国貿易は自由貿易であったので，長崎に来航した中国人は，自

---

(3) 『深見玄岱の研究』，石村喜英，雄山閣，昭和四十八年。
(4) 『長崎唐人の研究』，李献璋，親和銀行，平成三年，九三頁——一三頁参照。
(5) 『長崎の唐人貿易』，山脇悌二郎，吉川弘文館，昭和三十九年，八頁。

由に長崎に上陸し，自己の知人を訪ね，知人を頼って宿泊し，知人の仲介によって貿易をした。その中には，長く在留する人もいれば，単に貿易の業務を行う期間だけ，臨時的に滞在する人もいた。長期的に長崎居住を許可された人は「住宅唐人」と呼ばれた。彼らは日本への帰化人であり，日本人との婚姻や商売が自由にでき，日本で生まれた二世以降の人は，名前も日本名になり，その日常生活は日本人と変わるところがなかった(6)。臨時に滞在する人は「来舶唐人」あるいは「客商」と呼ばれ，日本人との婚姻や直接の取引は禁止されていた。

幕府の中国商人に対する態度は最初かなり寛大であった。しかし，ポルトガル商人が日本の西陣，堺，博多などの高級絹織物の原料となる中国産の生糸を一方独占的に商い，巨利を得たことによって，日本の銀が大量に国外に流出していた。この状態を抑制するため，慶長九年（一六〇四年）五月，幕府は輸入生糸の統制貿易，すなわち糸割符の制度を創った。

同時に，唐人貿易管理を強化するため，幕府は唐人貿易商との連絡交渉，唐人，唐船の管理および各種の業務上の必要性から，中国語と日本語との両方に堪能で，幕府と唐人との両方において信用がある人物をその間にあって仲立ちができるような役人として必要とした。そして，実際にその任務を円滑に成し遂げるため，中国語と日本語の両方ができる住宅唐人を幕府の地役人として唐通事職にあたらせた。糸割符制度が創られた慶長九年（一六〇四年）に，時の長崎奉行小笠原一庵が，帰化した住宅人で日本語を習い覚えた馮六に通事役を仰せ付けた。これより，唐通事制度が始まった(7)。

唐通事の役職はたいへん重要であった。通事とは通訳を意味し，古代の通訳は通事のほか訳語とも呼ばれた(8)。推古天皇十五年（六〇七年）七月，聖徳太子は大

---

(6) 『長崎の唐人貿易』，五〇頁。

(7) 「日本近代教育における中国語教育成立過程の研究——東京外国語学校漢語学科の成立を中心に——」，朱全安，博士学位論文として東京都立大学に提出，一九九五年，六一頁。

なお，唐通事の始祖馮六の実在を疑う説もある。

「唐通事始考」，山本巌，『宇都宮大学教育学部紀要』第三十八号第一部。

「唐通事始続考」，山本巌，『宇都宮大学教育学部紀要』第三十九号第一部。

(8) 第二回遣隋留学生，学問僧に奈羅訳語恵明と記されている（『日本書紀』による）。『日華文化交流史』，本宮泰彦，冨山房，昭和三十年，七〇頁。

礼小野妹子を遣隋使として派遣した際，「以鞍作福利為通事」と日本書紀に記されている[9]。しかし，江戸時代の唐通事の職域は，単なる中国語の通訳にとどまらず，幕府の諸法令の伝達，執行や，各種貿易業務の折衝にも携わるなど広範であったため，同時代の阿蘭陀「通詞」と異なって唐「通事」という表現を用いた。それは唐人貿易の諸事万般を応接するという意味であると伝えられている[10]。

唐通事の仕事は幕府の地役人として唐人貿易に対する監視，統制，管理という商務的な機能を果たすだけではなく，一方で唐通事は，鎖国政策を採っている幕府にとっては，海外の風聞を収集，報告し，いわゆる国際情報官のような重要な存在でもあった。

幕府の直轄領である長崎は鎖国時代において唯一の対外開放された窓口であった。当時，隣国の中国に関する情報や西洋諸国に関する風聞を，海外の渡来船より聞き出し，集めて幕府に上申する責務を課せられたのは，唐通事と蘭通詞（阿蘭陀通詞）であった。

中国船やオランダ船が長崎に入港する際，幕府に海外情報報告に当る風説書を提出する。風説書の起源は古く，日唐交通時代の唐国消息，あるいは唐消息などと呼ばれた。江戸時代には，風説定役という職位が設けられ，元禄十二年（一六九九年）に，大通事林道栄が専任として任じられた[11]。しかし，この役職が設けられる以前にこのような仕事はすでに始まっており，一六四〇年代，中国の明清交代の戦乱の時期，幕府が激変する中国の情勢を知るため，唐通事に来航した中国船よりその消息を聞き出して，文章にして江戸幕府および長崎奉行に報告させた。史実から見れば，風説定役という職位が設けられる前の五十年余の間，風説書を作成することは唐通事にとっては，重要な責務の一つとして行われていたのである[12]。

② 唐通事の世襲制と唐話稽古

唐通事職に，唐通事頭取，唐通事諸立合，御用通事，直組立合通事，大通事，小

(9) 『日本書紀』，推古天皇十五年七月条。
(10) 『長崎事典』歴史編，長崎文献社，昭和五十七年，一〇一頁。
(11) 『長崎事典』歴史編，一〇四頁。
(12) 『長崎唐人の研究』，三一七頁。

通事，稽古通事，唐年行司，風説定役などの役職があった。これらの職位の人選はほとんど住宅唐人，あるいはその子孫から選出され，任命されるが，主に日本人からなる職もあった。江戸初期には，中国語のできる日本人は中国船が来航した際，船頭や客唐人の通訳として取引などを手助けし，報酬を得ていたが，寛文六年（一六六六年）に，唐内通事として百六十数人が認められ，唐人貿易が円滑に運ばれるための諸事務を引き受けた(13)。

唐通事職は世襲であった。長崎の唐館関係の諸役人の在職状況を記録した『訳司統譜』やほかの長崎史料から見れば，来日した中国人一世の住宅唐人が唐通事役に着いた後，その子孫も唐通事役に着くということが数多く見受けられ，祖父，父親の功績，推薦によって，唐通事の職が代々受け継がれていった。

江戸時代前期，日本に来航した中国人は，貿易を営む商人や唐船の船員がその大半を占めているが，時の明朝はちょうど清朝への王朝交代による戦乱期にあたり，清朝に服従しない明朝の遺臣で貿易船に乗って来日した人が多かった。また，時折，船客として儒者，医師，芸術家，武芸者等の文化人も長崎へ渡航した(14)。

来航した中国人のなかでも，長く長崎にとどまり，長期に亙って長崎に在留した中国人で長崎奉行宛に誓詞を提出する(15)ことによって日本に帰化した人々は「住宅唐人」と呼ばれていた。実際に唐通事になった人々の文化教養からみれば，かなり高い水準に達していることを考えると，住宅唐人になった人々は自国においても知的な環境に生活する人々であって，商人たちに必要とされる知識教養とは異なるものをもっていた。また，商人は船で日中両国の商品を運搬し売買することによって生計を立てているので，ずっと一箇所で長く滞在すると商売にならないということを考え合わせると，商人よりも，むしろ長崎に亡命してきた明朝の遺臣や，あるいは商売以外の職に従事する人が住宅唐人になる可能性が高いのではないかと思われる。

実は，明朝の遺臣である人々はもともと，明朝の皇親貴戚である場合が多く，当

---

(13) 『長崎事典』歴史編，一〇一頁。

(14) 『華夷変態』上（東洋文庫叢刊第十五上），林春勝・林信篤編，浦康一解説，東洋文庫，昭和三十三年，一七頁。

(15) 「唐通事の研究——特に訳司統譜・唐通事会所日録を中心として——」，松本功，『法政史学』第十号，法政大学史学会，昭和三十二年，一一三頁。

時の中国社会の上流階級に属していた。彼たちにはその階層に必要とされる才学教養を備えていたし，また相当の財産も持っていた[16]。『訳司統譜』の中には，住宅唐人で唐通事の始祖となった人々が記されており，また，明治時代の貴族院議員で，唐通事出身の何礼之が書いた「訳司統譜序」の冒頭にも，唐通事の由緒に関して，「明末避乱之士於沿海地方俾掌通訳之事（明末避乱之士（ヲシテ）沿海地方ニオイテ通訳ヲ掌ラシムル事)」と記述されている[17]。

唐通事，とりわけ中国から長崎に来航した商人と最も頻繁に交渉，接触し，中国語の語学力が最も要求される小通事・大通事になる実例から見れば，初代が住宅唐人もしくはその子孫であり，その後の代々は大抵唐通事職についていたので，世襲制が明白に現れていた。唐通事の多くは，中国語の素養が高く，幅広い文化的教養も兼ね備えていた。当時の長崎は，対外貿易とりわけ中国から来航した商人との対中貿易がその港町の中心的な事業となり，直接この貿易の折衝を担っていた唐通事たちは，自身の学識才能が傑出しているだけではなく，家柄も唐人社会において威望が高いので，長崎の地役人として抜擢されていた。幕府にとって，輸入輸出量が遥かに対蘭貿易を超えた対唐人貿易の重要性により，唐通事に与えられた役料は阿蘭陀通詞の役料より高かった。上述したことから，江戸時代の唐通事役は，社会一般において人々の注目を集めるような存在であったことを窺い知ることができよう。

このような重要な職務に就く唐通事たちは，幕府の地役人として，唐人および対中貿易を監督，管理する代理人である役職の故に，その最も要求される能力は，中国語の学殖素養であり，また，その素養の礎石となる文化的蘊蓄であった。

唐通事の家では，その役職を子孫代々に伝承し，子どもを唐通事の役職に就かせるために，家庭内で中国語教育を行い，その教授，学習の方法も各々の家庭に特有なものであった。唐通事家庭内の唐話教育は当時の漢文教育と大きく異なり，読み書きよりも，実際に唐通事として働く際に最も重要な会話能力の養成を重んじて進められていた。一般的には，子どもがまだ幼い時から，中国語の稽古をさせていた。

唐話学習の形態は集団学習でなく，家を教学の基礎とする家伝の形式を採ってお

---

(16) 「長崎と唐人」，『長崎事典』歴史編，九九頁。

(17) 『訳司統譜』，頴川君平編，明治三十年（『長崎県史』資料編第四，長崎県史編纂委員会編，吉川弘文館，昭和四十年，所収)，五九一頁。

り，個別学習であった。このような教学の形態は，唐通事職の世襲制にとっては，好都合である上に，その家庭環境が外国語の修得に必要とする言語環境を提供し，聞く能力と話す能力の育成にとっては極めて有効であり，適切であった。

江戸時代の教育は，とりわけ江戸初期においては，寛政異学の禁の直後に幕府の直轄学校となった昌平坂学問所はまだ林家の私塾であり，そこで朱子学を教えられたほか，私塾が数個あったが，教学の重点は学問を究める所に置かれ，庶民に対する教育は寺子屋で行われるのが一般的であった。寺子屋で教える教科は庶民生活を営む上に必要とされる簡単な読み書き，計算などであるが，いかなる外国語の教育も行われていなかった。それゆえ，たとえ唐通事職が世襲制でなくても，唐話ができるという技能の修得に対する制限を加えなくても，外国語である唐話の教学が私塾，もしくは寺子屋のいずれにおいても一教科として取り扱われすべもなく，家伝という形式となるしかありえなかった。

また，唐話教育＝外国語教育であるという視点に据えて見る場合，唐通事家系の子供が大きくても七，八歳で，小さいときでは「襁褓」の中という幼い時期から，親の口伝えによって語音を真似ることができ，そのことばを我がものにするには，まことに絶好の方法であり，いわゆる今日のバイリンガルの育て方と同じである。

③　深見玄岱の家系

深見玄岱の祖父は中国明朝の人で，名前は高寿覚であった。彼は福建省漳州府の出身であり，家系図によると戦国時代の斉国渤海王高観の後裔であると伝えられている[18]。高寿覚は医者であり，慶長初年薩摩に来航して，そこで医業を営んで住んでいた。薩摩に在住の間，慶長八年（一六〇三年）十二月，鎌田新右衛門の次男久兵衛が生まれ，高寿覚はその子を嗣（し）とした。その後，およそ慶長十四，五年（一六〇九，一六一〇年）頃，高寿覚は中国に帰った[19]。

高寿覚の嗣子久兵衛が，すなわち深見玄岱の父である。号は大誦居士，旧姓は高，旧号は一覧である。祖先が渤海王であったという家系説を信じ，渤海という苗字も

---

(18)　「深見家系譜」（「儒職家系」所収），『改定史籍集覧』第十九冊，近藤瓶城，臨川書店，一九八四年。

(19)　『長崎唐人の研究』，二一四頁。

用いて，「渤海久兵衛」とも称していた。元和三年（一六一七年）高一覧十五，六歳の時，養父高寿覚をたずねて中国に渡ったが，ほどなく養父が亡くなった。その後，高一覧は中国に十一，二年間滞在した。その間，「魯に遊び斉に転じ，燕を踰(こ)え趙に跨(またが)り，北は匈奴の域を経，南は東寧の隈に及ぶ。行々天下文物の盛なるを嘆じ，名山大川の勝を歴覧すること，殆ど十有余年なり一日，母を慕ふの念，歇(や)まず。輒(すなは)ち商舶に登り直に長崎に到る」（『先哲叢談』巻之五）[20]というように，高一覧は魯（山東省中部），斉（山東省の膠(こう)東半島），燕（河北省），趙（山西省）など中国北方の広域を遊歴し，山河文物を縦覧した。寛永六年（一六二九年），二十七歳の高一覧は薩摩に帰った。

高一覧は帰国して三年後に招聘を受け，武人として薩摩藩主し島津家久に仕えることとなり，更にその九年後に長崎唐通事職の任命を受けて，長崎に赴くようになった。

寛永十六年（一六三九年）鎖国政策が整い，住宅唐人，明の客商に対する管理も一層厳格になり，ポルトガル人貿易の禁止により，明の商船の来航が増えていた。その際，唐通事の職務の性質も大きく変わり，設置した当初の唐人貿易に便宜の提供から一転して，唐人貿易に対する統制と宗教の検察を施すこととなった[21]。寛永十七年，十八年にこの任を遂げるために，新たに四名の唐通事が任命され，高一覧はこの時期に唐通事職に任じられた。

前述したように，唐通事は，幕府の地役人として，唐人および対中貿易を監督，管理する代理人である役職の故に，最も求められている能力としては，中国語の語学力であり，また，幅広い文化的蘊蓄であった。

当時の長崎は中国との通商貿易の要衝であり，日中両国の貿易商人や，数多くの学者，儒者，医者，僧侶，とりわけ多士済済の文人墨客が雲集往来している閙市であり，人々の出入り，移動が絶え間なく頻繁におこなわれていた。長崎奉行所はここの管理，警備を強化するために，日中両方の言語，文化を明るい通事職の人選探しを急務としていたが，しかし，これらの条件を満たす適任者を求めるのはあまり容易なことではなかった。その頃中国の方は明清交代の激戦の最中であった。その

---

(20) 「深見玄岱」，『先哲叢談』，二一四頁。

(21) 「唐通事の設置とその変遷」，『長崎唐人の研究』，七七頁—九〇頁参照。

状勢のなか，戦乱を避け，安全の地を求めようという目的で渡来した明の帰化人の数は少なくなかったが，にもかかわらず，唐通事職の任に堪える語学力と豊かな識見とも一身に備える人材がなかなか選出することができなかった。

高一覧は少年の時より十年余り中国に滞在し，中国語を熟知していた。寛永十八年（一六四一年）高一覧はその中国語学力と学識才華が認められ，三十九歳で唐小通事になり，その翌々年新たに唐大通事に昇進した[22]。

高一覧は姓を高から深見に改めたのが唐通事になる頃であった。「深見」という苗字の由来は，祖先は中国の渤海の出身だったので，苗字を日本風に「渤海（ふかみ）」としたが，諸人に読み難いため，同じ音訓の「深見」に改め，深見久兵衛と称した[23]。

深見久兵衛を唐通事職に推挙したのは長崎在住の儒医陳明徳であり，彼は深見久兵衛の日本への帰郷より二年先，寛永四年（一六二七年）に中国より長崎に来航した。陳氏は深見久兵衛の仁徳，博学，その上，広博な閲歴を明察し，深見がまさに唐通事の重任に好適な人選であると考え，長崎奉行所に大誦を推薦した。長崎奉行が陳明徳の推挙を喜んで受け入れ，早速薩摩に深見大誦の唐通事就任に関する書状を藩主に送り，その後，深見久兵衛は薩摩を離れ，長崎に移り住むようになった。

深見久兵衛は小通事になってから，万治二年（一六五九年）唐通事役から退任するまで[24]，約二十年間唐通事の仕事をしていた。彼は唐通事在職の間に隠元隆琦禅師が来日するように，承応元年（一六五二年）四月[25]，承応二年（一六五三年）十一月二回に亙り渤海久兵衛という署名で[26]，陳明徳など住宅唐人と連名して懇請書を隠元に出していた。その懇請を受けて，隠元禅師が承応三年（一六五四年）七月に六十三歳の高齢で来日した。深見久兵衛は約二十年間中国語を用いてその役職で活躍し，退任した後に，寛文五年（一六六五年）六十三歳の時に長崎より宇治黄檗山万福寺へ赴き，隠元の退休により，黄檗山万福寺の第二代住持となった中国人禅師木庵の通訳として，木庵が将軍家綱に謁して継席を報告するための江戸行に

---

(22) 注(2)を参照。

(23) 「蓋し高氏は渤海より出づ。渤海の倭読は深見なり。故に以て称す」（『先哲叢談』巻之五）と記されている。

(24) 『訳司統譜』，六〇六頁。

(25) 『隠元全集』第四巻，平久保章編，開明書院，一九七九年，一五八五頁。

(26) 『隠元全集』第四巻，一五九六頁。

同行した[27]。

深見玄岱は深見久兵衛の四男として慶安二年（一六四九年）の出生であり，生まれた時に父久兵衛は大通事職にすでに六，七年在任して，活躍していた時期であった。優れた中国語の語学力をもつ父親の下に育てられた玄岱は中国語に触れる機会が多く，一般に唐通事家系に特有の唐話稽古教育も受けていたと思われる。

前述したごとく，唐通事の唐話学習の形態は集団学習でなく，家を教学の基本とする家伝の形式を採っており，子どもが幼い時期から，日本語を覚えると同時に中国語も覚えた。家庭内の稽古であるゆえ，生活の中で自然に中国語を身につけられ，ことばは親の口伝により，その音声の学習がされた。深見玄岱は十年以上中国で生活していた父親久兵衛のもとで，バイリンガルとして育てられていたに違いない。

深見玄岱の家系が中国においては祖先の家格が高貴で社会的な地位が高かったことについて玄岱の祖父高寿覚，父深見大誦（高一覧）のところで触れたが，深見玄岱も父大誦と同様に，堅く信じ，誇りと思っていたため，自ら姓を高と称し，高玄岱とも名乗った。

深見玄岱は深見久兵衛の四男であり，生まれる時に父久兵衛は大通事職に在任していた。優れた中国語の語学力をもつ父親の下に育てられた玄岱は中国語に触れる機会が多い上に，幼時より中国人禅僧戴曼公について学問技芸を学んでいた。

2．独立に師事

①　独立禅師の学問と書道

良き家庭環境に恵まれていた深見玄岱は五，六歳の頃から長崎の儒者，儒医である岩永宗故の門に入り，勉学した。凡そ十一，二歳の頃に，玄岱は明からの帰化人戴曼公を師として従い，儒学，医学，書法，詩文などを研鑽し，学業精勤の傍ら唐話修業の道に進んだ[28]。

玄岱の師戴曼公（一六〇〇年――一六七二年）は中国杭州府の出身であり，医学を

---

(27)　「深見久兵衛」，『黄檗文化人名辞典』，大槻幹郎・加藤正俊・林雪光編著，思文閣出版，一九八八年，三二二頁。

(28)　『深見玄岱の研究』，五八頁。

学んだ後，医を業とした。戴曼公は甚だ博識多才であり，詩文が精妙で，医学・医術にも優れていた。彼の名が最も知られている分野は書法においてであり，草，隷，篆のいずれも堪能で，とりわけ，草書が至妙であるという評は今でも書道界に聞こえる。戴曼公は当時の名流の詩社にも名を列ねていた[29]。承応二年（一六五三年）戴曼公は明の戦乱を避け日本に向かい，三月に長崎に着き，長崎奉行の許可を得て帰化人で医者の潁川入徳，すなわち玄岱の父親を唐通事の人選として推薦した陳明徳の宅に寄寓した。なお，同じ時期に，また日本に帰化していない朱舜水も臨時に長崎を訪れ，潁川入徳の宅に滞在していたので，戴曼公は朱舜水と親交した[30]。翌年七月，明の黄檗僧隠元が多数の僧侶を率いて長崎に来航し，同年十二月に五十九歳の戴曼公は隠元禅師の門に入って禅僧となり，道号が独立で，法諱を性易とした。

深見玄岱は戴曼公に付いて学問の研鑽と書道の研磨をともに進め，その詩文の才能が後に朝鮮通信使との唱和の際に発揮され，書道に関しては，優れた墨蹟が数多く残されており，今東京の浅草寺の観音堂にある「施無為」の額が深見玄岱の墨書である。後に玄岱は幕府の儒者として在任中，書家，文筆家をもって重責に任せられることが多かった。

深見玄岱の書については，新井白石，祇園南海，太宰春台など時の大学者の称賛を得，『先哲叢談』に，「徂徠，豪邁の資を以て一世を睥睨（へいげい）す。独り天漪（玄岱の号）に於ける，嘗て其の書を得んと欲し，且つ之れと交を締（むす）ばんことを求む。」とあり，大学者の荻生徂徠も，ただひとり深見玄岱の書を嘆賞した[31]。

なお，深見玄岱の書は戴曼公の風を受け継いで，師と同様，特に草書に秀でていた。後にその書法は子高頤斎に伝えられ，さらに同じく儒学者であり書を以って顕れた沢田東江へ受け継がれた[32]。

また，深見玄岱の文才，とりわけ，彼の中国語について当時碩儒と称された室鳩巣から大層賛せられ，大いに敬服されていた。

---

(29) 『黄檗文化人名辞典』，二八三頁。
(30) 『深見玄岱の研究』，六五九頁。
(31) 『先哲叢談』，二一五頁。
(32) 「沢田東江」，『日本漢文学大事典』，近藤春雄，明治書院，昭和六十年，二六九頁。

② 独立から受けた言語の薫陶

深見玄岱は戴曼公が日本に渡来して禅僧になった後に，独立禅師の門下生となり，それからの十数年間，独立禅師が示寂するまで玄岱は独立禅師の膝下に侍し，学問の研鑽に励んだ。玄岱は独立に入門したのは，万治二年（一六五九年）で，十一歳の時であり，独立は六十四歳の高齢になっており，日本に渡航して六，七年目に当たる。その時，独立が用いた言語が中国語であるのか，あるいは日本語であるのかに関する記録は不詳であるが，後に述べる玄岱の師のことばについての学習記事から見れば，独立が用いたのは中国語であったと判断できよう。玄岱は常時独立の身辺にいたので，師の言葉を学習，理解することは極めて重要で，自然のことであったことは想像に難くない。玄岱は唐通事家系に行われる唐話の稽古は受けていたとしても，杭州出身の独立が話している言葉は父親久兵衛がから学んだ福建の言葉と大きく異なり，難しかったようである。独立によって玄岱の中国語学習の様子が「自意先暁其正音。解其言語為務。日薫夜習。月漸歳浸。」（『小叙天漪高先生』）と記されている(33)。独立が日本に来航したのは五十三歳の時であり，そのような高齢で新たに外国語を習得するのはやや無理があり，更に，独立禅師は古稀を過ぎて，各所を経巡っていた時に常に唐通事の潁川官兵衛が随行していたことを考え合わせて推測すれば，独立禅師が常用していた言葉は中国語であろう。玄岱は日々独立から中国語を聞き，生きた中国語の薫陶を受け，中国語に通じるようになった。玄岱は独立の近侍として十一，二歳から二十四歳までの十数年間，師独立との会話が常に中国語を用いたであろう。

深見玄岱は師の逝去によって，十数年に及ぶ学問修業の時期が終わり，儒家，医家，文章家，書家となり，同時に，唐話の専門家でもあるように多才博学の学芸教養が身につけた。彼の中国語については，その熟達の様子は「語言音韻，則ち期せずして頗る解す」（『先哲叢談』巻之五）(34)と記されている。

---

(33) 『深見玄岱の研究』，六〇頁。

(34) 『先哲叢談』。

3．木下順庵の語学重視

延宝二，三年（一六七四，一六七五年）深見玄岱は二十六，七歳の頃に，上洛して，碩儒木下順庵の門下で学業に励み，とりわけ，詩文の教示垂範を受けていた。そこに七，八年間滞在し，木下順庵が幕府の儒者になり江戸に定住するまで，木下順庵について学んだ。深見玄岱と順庵との良師，高弟の関係はやがて新井白石との信頼関係を結ぶ機縁となった。

木下順庵（一六二一年—一六九八年）は京都の錦小路に生まれた。名は貞幹で順庵は号である。二十八歳（一六四六年）から松永尺五の門下で十年ほど朱子学を学び，万治三年（一六六〇年）加賀藩主前田綱紀に仕えるが，加賀藩に定住せず，金沢，江戸，京都を往来した。天和二年（一六八二年）六十二歳の時に，幕府に仕えることになり，江戸に定住し，林家以外の民間学者登用の道を開いた。木下順庵は人格高潔な教育者として，雉塾を開き，その学派を木門という。後に「木門十哲」と呼ばれる室鳩巣，新井白石，雨森芳洲，榊原篁洲，祇園南海など俊秀を多く育成した。木門の興隆は官学林家にとって大きな脅威となった。

深見玄岱は木門に入塾した時に，師の木下順庵は加賀藩の儒者であり，京都と江戸と金沢を往復していた。木門には，室鳩巣が深見玄岱より三，四年早く入っていたので，同窓として一緒に儒学を学んだ(35)。

木下順庵の高弟たちは中国文化，中国語に対する意識が同時代の儒者たちより，遥かに高かった。このことは木門の五先生と呼ばれる木下順庵の高弟たち—新井白石・室鳩巣・雨森芳洲・榊原篁洲・祇園南海—についても言えることである。彼らは儒学については勿論博識であるが，その他に，詩，画，書，篆刻などにも大変精通していた。新井白石の詩は秀逸で有名であり，祇園南海は詩と文人画で名前が広く知られている。

榊原篁洲は紀州藩の儒臣であり，『大明律例諺解』，『易学啓蒙諺解』，『老子経諺解』などを著して，名を鳴らした。なお，学問のほか，篁洲は黄檗僧独立，心越に

(35) 室鳩巣は十五歳（一六七三年）の時にすでに京都の木下順庵塾で指導を受け，深見玄岱が入塾したのは延宝二，三年頃のことであった。

篆刻を学び，篆刻を一個の独立した芸術として日本で広めた。後に日本で篆刻は一流知識人たちの嗜みとなり，江戸中期からは文人趣味として大流行するようになった。

徳川吉宗の享保の改革を補佐した室鳩巣（一六五八年——一七三四年）も新井白石と並び，木下順庵門下の俊才である。室鳩巣は五十四歳（一七一一年）の時に，同じ順庵門下の新井白石の推薦で幕府に出仕した。合理的な人材登用を可能にした足高の制を設けるなど，享保の改革を補佐し，のちには将軍吉宗と家重二代の侍講となった。政治舞台に登場した新井白石，室鳩巣，深見玄岱など木門の弟子によって，朱子学は林家から木下順庵門下にその中心を移した。

木門には深見玄岱と同様に中国語が堪能な弟子もいた。木下順庵は巨儒として名が高く，中国語に対しても格別な関心をもち，自分の弟子たちに中国語を学ぶように勧めていた。

雨森芳洲は十八歳の時に江戸で木下順庵の門下に入り儒学を学んだ。元禄元年（一六八八年）同じ木門の対馬藩儒が没し，翌年，対馬藩は順庵に後任儒者の推薦を求めた。対馬藩は，外交の窓口として，朝鮮との友好関係を維持し，貿易外交問題を折衝し，外賓を接待するなど任務を背負うので，優秀で有能な儒者を必要としていた。木下順庵は当時二十二歳の芳洲を推薦した。木下順庵の進言もあって，雨森芳洲は江戸藩邸勤めのまま，引き続き順庵のもとで学ぶよう対馬藩から命じられた。翌年（一六九〇年），木下順庵の勧めで，二十三歳の雨森芳洲は中国語を学ぶために，長崎へ遊学した。芳洲は唐人屋敷の中国人から実際に中国語を習い，とりわけ，音読や会話を大いに学んだ。二十九歳の時に，雨森芳洲はもう一度長崎遊学する機会があったので，中国語により一層習熟することができた。

深見玄岱は木下順庵について約八年間修業し，三十四歳の時に京洛での遊学生活を終わらせ，郷里の長崎に戻った。玄岱は生計を立てるために，医業を営んでいた。この頃玄岱の文筆家，書家の名声は既に天下に響いていた。貞享二年（一六八五年）玄岱は薩摩藩主島津光久に招かれて侍読となり，薩摩で約六年に亙って勤めた後，病弱のため侍読を致仕して長崎に帰り，文学医業を続けた[36]。

---

(36) 『深見玄岱の研究』，四二頁，七七頁。

三　深見玄岱の中国語による活躍

1．儒者としての登用

宝永六年（一七〇九年）六月，徳川家宣が六代将軍になり，新井白石は家宣から厚い信頼を受けて幕府に登用され，政治の実務を担当して，政治の中枢にいた。それから，いわゆる「白石時代」が始まった。その六ヶ月後，同年の十二月に，深見玄岱が新井白石の推薦により，江戸幕府からの儒員登用の通達を受けた。長崎の一町儒者，一町医者であった深見玄岱がこれほどに栄進した事由として，かつて新井白石と同門の木下順庵の弟子であったことや，玄岱が多才碩学の俊英であることや，もしくは，玄岱が幕府の儒員として登用される間もない正徳元年に「木門」出身の儒者室鳩巣と三宅観瀾も同じく新井白石の推薦で幕府に招聘されたことに見えるように，当時の時勢として，木下順庵の門下，いわゆる「木門」よりも，代々幕府の文翰を掌る林大学頭信篤が率いる「林派」の勢力が強かったが，この「林派」に対する対抗として，新井白石には幕府の儒者をすべて「木門」より推挙する意図があったことなど挙げられる(37)。しかし，見落としてはならないもう一つの要因としては，学識学芸において，同席の儒者室鳩巣と三宅観瀾より尚一層勝ったのは，深見玄岱が唐話も精通老練であった点である。後に玄岱が江戸で幕府の儒員としての活躍振りをみれば，卓越の中国語学の能力こそが新井白石が深見玄岱に対して少なからず期待していたところであった。

深見玄岱は宝永六年十二月に幕府聘用の通達を長崎奉行所を通じて受けてから，直ちに長崎を出立し，約三ヶ月後の宝永七年二月下旬に，江戸に着き，凡そ九年間に及ぶ出仕生活に入った。同二月二十五日に玄岱が初めて幕府に参入し，その際寄合儒者に加えられ，廩米二百苞をたまわり，束髪すべしと命ぜられたと同時に，名

---

(37)　『新井白石』，宮崎道生，吉川弘文館，平成元年，一七八頁―一七九頁。
『将軍と側用人の政治　新書江戸時代①』，大石慎三郎，講談社，一九九五年，一一三頁。

も新右衛門と改められた。爾後，深見玄岱の通称は「深見新右衛門貞恒」となった[38]。

深見玄岱は幕府の儒者として在任中，書家，文筆家をもって重責に任せられることが多かった。正徳元年（一七一一年）三月に玄岱は徳川家宣が朝鮮国王へ贈る金彩屏風について，各画面の題辞作成および筆書を命じられた[39]。深見玄岱は撰述した屏風の画賛文『白雉帖』は筆法巧緻，文辞秀美であり，白石はそれを「文之縦横変化。無不各極其致。」と称揚した。さらに玄岱は自撰の『白雉帖』を篆，隷，楷，行，草の五書体をもって絹本に認めた。元来，玄岱は師独立から運筆の妙を給わり，書家として大通事の林道栄とともに世人から「崎陽の二妙」と呼ばれるほどの名書家であった[40]。

① 朝鮮通信使との唱和

儒者，文人として深見玄岱はその秀逸の才能を華々しく発揮したのが，彼が幕府の儒者に着任した翌正徳元年（一七一一年）十一月，朝鮮使節団が日本に訪れる際朝鮮使との筆談唱和した時のことであった。

朝鮮と日本の通交は室町時代の元中九年（一三九二年）に，高麗が滅び，朝鮮が建国した時に遡ることができ，その後にも続けていた。しかし豊臣秀吉の時代に，文禄の役と慶長の役との二度にわたる強行した朝鮮出兵により中断された。江戸時代に入ってから早々，慶長六年（一六〇一年）に徳川家康が対島藩主の宗義智に命じて日朝の修交を求めたが，朝鮮側は直ちにそれに応じず，慶長十二年（一六〇七年）に至ってようやく使節を日本に派遣して，両国の間の通交を回復し，江戸時代に日本と正式に国交を結んだ唯一の友好国となった。それ以来，朝鮮王の使節（朝鮮通信使と呼ばれる）は幕府の将軍の代替りごとにそれを祝賀して国書をもって江戸に来聘することとなり，朝鮮来聘使とも呼ばれていた。

当時，朝鮮通信使とその一行は三百数十人から四百人にも及び，対島出発してから江戸に到着するまで沿道の宿泊地では，文人墨客，知識人などが宿場を訪れて新

---

(38) 『深見玄岱の研究』，八七頁。
(39) 『深見玄岱の研究』，一四五頁，一六二頁。
(40) 『深見玄岱の研究』，一三二頁。

知識を採り入れるのが風習であった[41]。徳川家宣の就任にあたって，正徳元年（一七一一年）に朝鮮通信使が来日し，深見玄岱は幕命により，十月二十八日と十一月五日の両日，新井白石を中心とした木門の儒者木下菊潭，三宅観瀾，室鳩巣などの一団に同行して，朝鮮通信使の宿館へ応接役として出仕し，使節たちと筆談唱酬を行った。筆談唱酬の詩文を集めて刊行した『七家唱和集』に，玄岱の唱和集『正徳和韓集』が収められている[42]。その中には「北京城」「万里城」「山海関」「竜門」など中国の山河名所が通信使との話題に上ったことが伝えられ，玄岱は度々中国に渡ろうと念願していたが，しかし「而国禁不許越界」の状勢に，やむをえなく「乃退閲中原与地図等效作臥遊」しかできず，「凡其名山大川古今沿革。俯仰一室中。歴々在目。」と愁傷の情感を語り，その雄大な山河に対する深い感懐および祖上と祖氏の国中国を思慕の情が切々として綴られている[43]。ちなみに，深見玄岱は唱和の詩文がほか諸儒よりはるかに数多いため，その応接の功を称え，幕府から銀十枚，時服二組を給与された[44]。

深見玄岱が幕府の寄合儒者として顕著な業績を築いたのは，文筆の逸秀，書道の造詣，あるいは学問の淵博によるのみでなく，彼が熟達した中国語力をもって，室鳩巣や三宅観瀾など同席の寄合儒者より異彩を放ったことにあった。

宝永六年ごろ，唐人貿易に銅貿易が行き詰まって，前年の宝永五年，水手が唐人屋敷で騒動を起こした。日本側には直接の関係はないが，幕府はこの事件を機会に元禄十一年（一六九八年）に規定した唐貿易船八十艘の定数を減らし[45]，騒動関係者が乗り組んでいた二十一艘の貿易船を積戻させ，翌宝永六年からは五十九艘を入港定数とした[46]。しかし唐船の入港定数を減らしても，元禄十一年に定めた輸出の銅量は変化せず，そのまま据え置かれていたから，宝永六年以後の貿易状況が改善されることなく，むしろますます行き詰まった。宝永七年（一七一〇年）には，幕府は元禄十一年の輸出銅約束量を守りきれず，唐船へ渡した銅量は約束量より約

(41) 『新井白石』，二一〇頁。
(42) 『深見玄岱の研究』，一七一頁。
(43) 『深見玄岱の研究』，一一九頁。
(44) 『深見玄岱の研究』，一七三頁。
(45) 『長崎の唐人貿易』，三一六頁。
(46) 『長崎の唐人貿易』，一〇三頁。

二百万斤をしたまわった[47]。貿易が約束通りできないため，唐船が荷物を積んで帰るか，もしくは長崎へ預けて帰るかの困境に面し，貿易はお手上げのありさまであった（「唐通事会所日録」八月十八日，十二月十七日（『通航一覧』刊本第四，三〇五頁）。この時期はあたかも第六代将軍家宣が即位し，新井白石が幕府の政策制定を携わる時期であり，宝永六年将軍家宣が長崎貿易の問題について白石に諮問し[48]，翌宝永七年に幕府はすでに元禄十一年の約定銅量の手直しを考慮したのである。深見玄岱はちょうど同じ時期に幕府の儒者として登用されるが，彼が長崎に住み，父親は唐通事であり，さらに唐話に明るいなど他の儒者にない諸条件をそなえていたことを，幕府は長崎貿易問題を念頭に考慮した上でその任用を決めたと思われる。

事際，幕府の期待は裏切られず，深見玄岱は長崎貿易に対して貢献した。上述した長崎貿易の様相が宝永期から正徳初年にかけて一向改善の兆しを見えなく，闇で密貿易が盛んに行われるようになってしまった[49]。ついに幕府が正徳新令を出す前年の正徳四年五月十四日に長崎奉行に対清密貿易などの取り締まりを令し，また同二十日に西国諸大名に清密貿易商の査検を命じた[50]。幕府の西国諸大名に下達すべき草案を新井白石が書き上げ，長崎奉行を通して唐人へ申し渡すべき草案を深見玄岱，三宅観瀾，室鳩巣などに命じて起草せしめたが，玄岱が作成した文が選出され採用された。おそらく漢文を書くことにしても，唐話も精通していた玄岱の文章がもっとも適切であったのが採用されたゆえであろう。なお，玄岱の筆になった原文を所在不明であるが，その漢文の和訳が徳川実記に記されている。

② 音韻を解することによる詩の依頼

深見玄岱が師独立と父深見大誦から受け継いだ唐話を駆使する能力は幕府に仕えるのに役立っただけに止まらなかった。玄岱は周囲の儒者文人の詩文を論評する際にも，それによるところが多かった。深見玄岱は文章詩賦をかなり自負していた室

(47) 『長崎の唐人貿易』，一〇五頁。
(48) 『新井白石』，二二一頁。
(49) 『新井白石の文治政治』，栗田元次，石崎書店，昭和二十七年，四〇七頁。
(50) 『支那文藝論藪』，青木正児，弘文堂書房，昭和二年，一七九頁。

鳩巣の詩を漢土の発音で読み，直ちに詩の欠点を指摘した逸話が『先哲叢談』と『可観小説』(『先哲叢談』巻之五，高天漪の条および青地礼幹著『可観小説』『加越能叢書』第一所収，巻五，九六頁）に伝えられ，さらに，新井白石の漢詩集『白石詩草』に寄せた序文の中で，「夫其唐者在乎声調節奏」，「先不辨音。音且不辨。曷詩為乎。」と当時の文人墨客が漢字の中国語音でさえ知らずに，ひたすら李白や杜甫を模倣して，詩を賦することを批評した[51]。）室鳩巣や新井白石など玄岱と親密に付き合った儒者文人は好んで彼に詩評してもらい，彼の中国語に関する知識が周囲の儒者に多くの影響を与えた。

2．明律の研究

① 明律の言語

幕府の長崎貿易に関する方策に関して，深見玄岱は唐話をもって起用されたもう一つの事例があった。先述した宝永六，七年の長崎貿易の状態と関連して，新井白石は中国の法律からその解決策を見つけようとした。江戸時代に漢籍の輸入状況について詳しい大庭脩氏の研究は，正徳四年（一七一四年）十一月二十六日，新井白石が『大明律附解』『大明律箋釈』『大明律添釈旁注』など大明律十部と，『大清律集解』など大清律二部の合計十二部中国法律書を紅葉山文庫から借り出したことが明かにした[52]。ところで，明律書が書き言葉である文言のほかに，話し言葉である白話も用いられているので，当時の唐話を理解できないと明律書を読めなかった。新井白石は唐話についての知識が厳密に書かれた明の法律書を読めるほど達していなかったので，明律書を読解するにあたって，深見玄岱は中国語の語学力を駆使して白石の疑問に答え，明確に文章の意味を理解できるように解説したと判断できよう。同じ正徳四年に白石は紀州で明律研究を行った榊原篁洲の明律の注釈を批判し，榊原篁洲の注釈が難解な語の意味を大抵前後の文章の意味で推測しているので，その語の意味を明瞭にする必要があると述べたと伝えられている[53]。ちなみに，新

(51) 『深見玄岱の研究』，一四一頁。

(52) 『江戸時代の日中秘話』，大庭脩，東方書店，一九九〇年，一〇七頁。

(53) 『江戸時代における中国文化受容の研究』，大庭脩，同朋舎出版，昭和六十二年，二二五頁。

井白石の明律研究は翌年沙汰された正徳新令のためであった。

② 玄岱と有隣の研究

深見玄岱がその唐話の藝，中国語学力によって挙げた顕著な業績として，もっとも広く知られているのは，『大清会典』に訳文をつけたことであろう。享保年間，幕府の命を受けて深見玄岱と玄岱の三男で，同じく幕府の寄り合い儒者である深見有隣父子が中国の法律書『大清会典』の翻訳に従事したと伝えられている(54)。

時の将軍徳川吉宗は法律研究を好み，彼が出身する紀州藩ではもともと明律の研究が盛んであった。吉宗はまだ紀州の藩主であった時期から中国の法律書を藩儒に解明させ(55)，将軍になってからもますます中国の法規律令に関する研究に熱意を上げた。享保六年（一七二一年）吉宗は諸寄合儒者に研究の課題を与えた際，唐話を熟知している深見玄岱，有隣父子に『大清会典』の和解を命じた(56)。

『大清会典』は清朝の制度，典礼を記した勅撰の書であり，明代の会典に準じて編集されたものである。深見玄岱父子に翻訳を命じたのは康熙二十九年（一六九〇年）清朝最初に完成とともに施行された『康熙会典』であって，大庭脩氏の調査によれば，この会典ができたわずか三十年後の享保五年（一七二〇年）長崎経由で日本に新渡したもので百四十一冊があった(57)。『大清会典』には難解な文が数多く，まさに室鳩巣が記していたように「新右衛門父子には他に大清会典と申大部の書の和らぎを被仰付候，…中々難読物にて候。新右衛門父子も難儀見へ申候。其故新右衛門家督久大夫，比日長崎へ罷越，唐人に出會吟味可仕旨願申上候て追付罷立申候」（室鳩巣書簡『兼山秘策』）であり，『大清会典』は中国語を精通している深見玄岱父子にとっても，甚だ難読な書物であった。それゆえ，直接中国人に文意の難解な箇所や唐話による読みの不明な点などを尋ねる必要があり，当時，玄岱はすでに古稀を越した高齢に達していたため，実際に長崎まで中国人に尋ねることができず，息子の有隣が享保六年の十月に江戸を立ち，十二月に長崎に到着した。それから五

(54) 『深見玄岱の研究』，一六四頁。
(55) 『江戸時代の日中秘話』，一二三頁。
(56) 『江戸時代の日中秘話』，一二七頁。
(57) 『江戸時代の日中秘話』，一三一頁。

年の長い年月をかけて，享保十二年（一七二一年）二月に江戸に戻り，『大清会典』の和解を行った[58]。

長崎で深見有隣は『大清会典』について尋問，相談した中国人相手が『有徳院殿御実記』によれば朱佩章であるが，大庭脩氏の研究によっては，それ間違いであり，深見有隣の相談相手は孫輔斎であった[59]。『大清会典』は中国の諸事情に基づいて作成されたのであるから，中国語の文言と口語の知識のみで理解し難い部分があり，有隣の相談相手である孫輔斎でさえも「…此書係各衙門理事之書，即有才学未曽親歴衙門事務者一時難以応答」と述べ，自分が時折お尋ねに対しても十分に知悉していないために，適切な答えができなかったと嘆じた[60]。現在多くの書物においては，『大清会典』を翻訳したのは深見玄岱と深見有隣と書かれているが，確かに深見父子ともども享保六年に幕府の令を受けた。しかし玄岱が高齢のうえ病弱であったため，有隣独りで同年の十二月長崎に赴き，そこで滞留中の翌七年八月に玄岱が江戸の自邸に辞世した。この状況から推測すれば，深見玄岱は唐話を熟知しているゆえに幕府から翻訳を依頼されたが，実際に『大清会典』の翻訳を行ったのはむしろ深見有隣一人であった。なお，幕府から信頼された有隣の学識，とりわけ熟練した唐話の藝が父玄岱の培育のたまものであると言えよう。

四　むすび

深見玄岱は幕府の儒者として出仕より病没までの十数年間，その多才博学，さらに特有の逸才，唐話の藝をもって，学術文化の都邑，江戸で大勢の学者文士との交遊を広げた。その中で，前に言及した新井白石，室鳩巣，三宅観瀾のほか，同じく幕府の儒者である土肥霞洲，木下菊潭，紀州藩の儒者で名詩人祇園南海，対馬藩の儒者で唐話学者雨森芳洲，柳沢吉保の儒者で唐話学者荻生徂徠などとも交流を重ねた。この考察を通して，江戸中期の中国語受容上において，唐通事と漢学者との二つの流れに融和する立場にある深見玄岱についての史実に光を当て，その解明する

---

(58)　『江戸時代における中国文化受容の研究』，三一一頁。
(59)　『長崎の唐人貿易』，一四二頁―一四三頁。
(60)　『江戸時代における中国文化受容の研究』，二四一頁。

ことによって今まで注意が払われなかった中国語の応用事例を提示することができた。

付記　本論文は千葉商科大学平成13年度学術研究助成金による研究の成果である。

参　考　文　献

1　『訳註　先哲叢談巻五』，藤田篤訳，東京金港堂書籍，明治四十四年。
2　『長崎県史』史料編第四，長崎県史編纂委員会編，吉川弘文館，昭和四十年。
3　『長崎唐人の研究』，李献璋，親和銀行，平成三年。
4　『長崎の唐人貿易』，山脇悌二郎，吉川弘文館，昭和三十九年。
5　「日本近代教育における中国語教育成立過程の研究―東京外国語学校漢語学科の成立を中心に―」，朱全安，博士学位論文として東京都立大学に提出，一九九五年。
6　『日華文化交流史』，本宮泰彦，冨山房，昭和三十年。
7　『華夷変態』上（東洋文庫叢刊第十五上），林春勝・林信篤編，浦康一解説，東洋文庫，昭和三十三年。
8　『隠元全集』，平久保章編，開明書院，一九七九年。
9　『深見玄岱の研究』，石村喜英，雄山閣，昭和四十八年。
10　『新井白石』，宮崎道生，吉川弘文館，平成元年。